観能のタベ

（石川県立能楽堂）

令和元年七月六日（土曜日）午後五時開演

演目解説　杉山欣也（金沢大学人間社会研究域教授）

狂言　雁礫（がんつぶて）

狩りを嗜んで日の浅い大名が池に下りた雁を狙い大雁股を番えていると、通りかかった使いの者が礫を打ってお先に雁を仕留めてしまいます。獲物を二人で取り合うところへ目代が出て仲裁に入りますが、雁を狙い殺して置いたとか、男を射殺してやるとかいう、大名の理不尽な言い分にあきれ、大名の腕前を見てとって、みごと雁を射当てたなら大名のものにしようと提案します。大名の空威張りと打損じたみじめさが対比されます。

能　胡蝶（こちょう）

和州吉野の奥に山居する僧（ワキ）が名所見物に花の都を訪れ、一条大宮の由緒ありげな古宮に足を踏み入れます。僧が階の傍らに色鮮やかな梅の花の盛りを眺めていると、女（前シテ）が現れてここをどことお思いですかと呼びかけます。ここは内裏にも近く、昔から殿上人が春の遊びを催し、絶えず眺めた梅であると教えた女は、自分は名のある者ではないと僧の問いには答えません。それでも僧が委しく知りたいと物語を促すと、女は実は人間ではない、花に戯れ花に心を染める胡蝶であると打ち明けます。胡蝶の女は梅の花に縁のない身を嘆き、僧に言葉を交わして成仏を願うとも述べます。胡蝶の女は、中国・荘子の胡蝶の夢の故事や源氏物語・胡蝶の巻の六条院の舞楽に思いを馳せ、夢での再会を約束して消えます（中入）。僧は夢を頼むかいのないはかない約束とは思いながらも、梅の木陰で読経の声を立て仮寝するところへ、胡蝶の精（後シテ）が美しい姿を現します。胡蝶の精は法華経読誦の功力により成仏し、梅の花に戯れることができると喜び、さながら歌舞の菩薩のように舞い遊びます。やがて胡蝶の精は春の夜の明け行く雲に羽を翻し、霞に紛れて消え失せます。

（西村　聡）

前シテ（里女）　**鬘をつけ、鬘帯をしめ、小面の面をかける。摺箔を着附に着、上に色入唐織を着る。（持物、扇）**

後シテ（胡蝶の精）　**黒垂をつけ、蝶冠をいただき、小面又は泣僧の面をかける。摺箔を着附に着、色大口をはき、腰帯をしめる。その上に長絹又は舞衣を着る。（持物、扇）**

（午後七時頃終了予定）